

## 2009年2月のあびき被害と来襲特性についての検討

片山 裕之<sup>1)</sup>, 加藤 広之<sup>2)</sup>, 丹治 雄一<sup>2)</sup>, 中山 哲巖<sup>3)</sup>

### Numerical Analysis about Disaster by Abiki on February, 2009

Hiroyuki Katayama<sup>1)</sup>, Hiroyuki Kato<sup>2)</sup>, Yuichi Tanji<sup>2)</sup> and Akiyoshi Nakayama<sup>3)</sup>

#### ■ 要 旨 ■

2009年2月24日夜半から25日の朝にかけて九州西部において「あびき」と呼ばれる潮位副振動が発生し、鹿児島県上甕島では振幅3mの水位変動が生じ、浦内湾内小島漁港では漁船転覆や浸水などの被害が発生した。今までは1979年に長崎で発生したあびき(振幅278cm、周期35分)が既往最大であったが、小島漁港に來襲したあびきはそれを超えるものであった。1979年のあびきについては、Hibiya et al(1982)が、発生から伝播過程における特定周期の増幅機構などが明らかにしているが、九州西岸広域で生じるあびきの空間特性について検討した研究は見られなかった。

本研究では、非線形長波方程式による数値計算であびきの空間的な伝播状況について検討した。その結果、九州西方で発生した微小気圧波が、沖縄トラフで屈折しながら五島灘に増幅されながら進行してくること、浦内湾では入射周期24分で増幅が大きいこと、あびきの到達時間は入射周期に影響されないことがわかった。

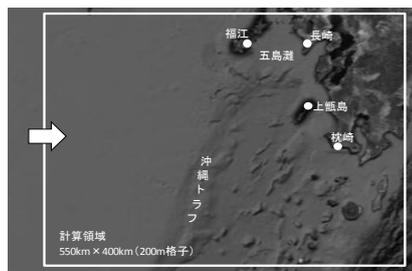


図-1 地点位置と計算領域

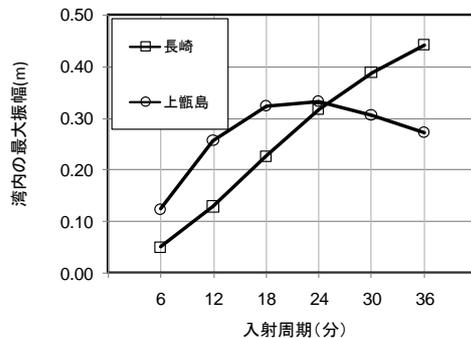


図-10 到達波の最大振幅

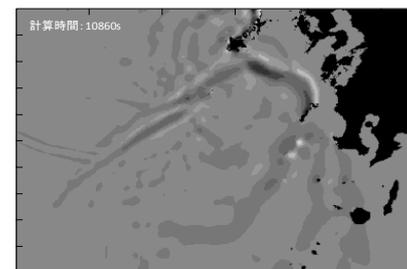
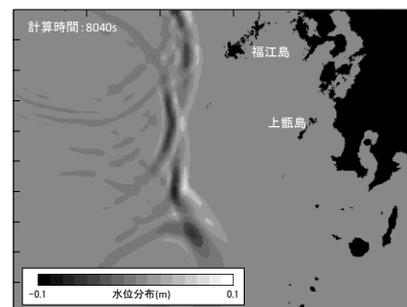


図-8 計算によるあびきの伝播状況

1) 技術研究所  
2) 財団法人 漁港漁場漁村技術研究所  
3) 独立行政法人 水産総合センター 水産工学研究所

\* 海洋開発論文集, 第26巻(2010), 土木学会, pp837-842 掲載